

立ち読み版

連載 インタビュー
Umano! #16



TAC 株式会社 代表取締役社長

ただ としお
多田 敏男さん

1953年生まれ。神奈川県出身。慶應義塾大学卒業後、公認会計士の資格取得の学習を経て当社入社。法人研修事業の立ち上げを任せられ、以後、1990年に取締役、1998年に専務取締役、2007年には取締役副社長を歴任。2018年10月に代表取締役社長に就任する。利益を確保しながら、新たな資格の創出や、講座の拡大などを積極的に仕掛けていく方向性を打ち出している。

【写真】 野村 雄治

中小企業診断士などの資格ビジネスで プロ人材を世に送り出す



中小企業診断士の中には、「TACで学んだ」、「TACで講師を務めた」という人は少なくない。この国で資格を取得するとは、単にメシの種ではなく、自己研鑽や人脈づくりの一環という重みをもっている気がする。

中小企業診断士には、弁護士や公認会計士と違って独占業務というものがなく、難度の高い資格の割には食べていくのが難しい印象がある。資格を中心としたビジネスを仕掛ける企業ならではの将来戦略を、中小企業診断士を代表して聞いてみたい。

「資格の学校」から研修、出版まで

原：私たち中小企業診断士は、貴社には大変お世話になっています。資格ビジネスの現状を教えてください。

多田：当社は、社会から求められる“プロフェッション”の養成を、創業以来一貫して行ってきました。プロフェッションとは、中世ヨーロッパでは神に誓いを立てて従事する仕事であり、法律家、会計士、医者、教師、技術者など専門家を表す言葉です。そこには大きな責任と、厳しい倫理観が求められていたのです。私たちは既存のものだけでなく、新たなプロフェッションの創造を目指しています。

以前、「ダブルスクール」という言葉が流行したように、当社でも学生の利用が活況でした。今は大学の出欠チェックも厳しくなり、簡単に来られなくなったということもあるでしょうし、学生のニーズが一巡したこともあるのかもしれませんが、学生は減っていますが、その分、幅

広い世代での利用が広がっています。ただ、この頃は高止まりの状態で、業界の競争は厳しくなっています。

その時々が必要とされる資格というのがあって、ここ数年は宅建が注目を浴びていました。宅建がいいと不動産つながりで、不動産鑑定士などの需要も伸びてくるんです。会計士試験は監査法人への就職が厳しくなった時期には受験生が減りましたが、最近は監査法人などの採用が増えたことで、受験生が増えてきました。

原：資格というものは、世相を反映する面が強そうですね。さらに、資格の学校以外にも研修、出版、人材事業なども手がけていると伺いました。

多田：研修事業については、企業から希望が出てきたんです。チャンスだと考えて拡大路線の一つとして法人事業を始めました。企業にどのように売ればいいのか、どの程度の金額を請求すればいいかなど、素人ばかり集まっているのでスタート時は大変でしたが、他の研修会社とも仲良くなり、勉強させてもらいながら

続きは雑誌で

【取材・文】 原 正紀 | 株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役・高知大学客員教授・成城大学非常勤講師。中小企業診断士。早稲田大学法学部卒業後、大手メーカー、株式会社リクルートでの勤務を経て、独立。産学公徳に対し、採用・育成・人事制度構築など、人材関係の幅広い提案を行う。著書に「採用氷河期」（日本経済新聞出版社）、「優れた企業は日本流」（扶桑社）、「インタビューの教科書」（同友館）など多数。

Umano! | Toshio Tada